

言語としての手話・文化としてのろう

言語としての手話・文化としてのろう

On Sign Language and Deaf Culture

市 田 泰 弘
檜 田 美 雄*1

＝講演会の諸データ＝

日 時……1998年11月26日（木）午後1時～2時30分

場 所……徳島大学 ^{じょうさんじま}常三島キャンパス 共通教育棟 B401教室

参考文献…①E. ドルニック著、市田泰弘ほか訳『文化としてのろう』D PRO。

②木村晴美・市田泰弘『はじめての手話』日本文芸社。

③『現代思想』（臨時増刊・総特集 ろう文化）24巻5号。

司 会……檜田美雄（徳島大学共通教育科目『社会学・社会の発見Ⅱ』担当者）

聴 衆……約六十名（徳島大学各学部学生，研究生，徳島県立聾学校教員などを含む）

講 師……市田泰弘（いちだ やすひろ，国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官）

協 力……徳島県聴覚障害者福祉協会（手話通訳者2名の派遣を受けた）

【まえがき：掲載までの経緯】

ここに掲載するのは，平成11年11月26日に，社会学特別講義として行われた授業（講演会を兼ねる）『言語としての手話・文化としてのろう』の全記録（質疑応答含む）である。この講義を活字化する予定は当初はなかった。し

* 1 市田泰弘は，国立リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（メールアドレス：ichida@rehab.go.jp），檜田美雄は，徳島大学総合科学部人間社会学科行動科学大講座＝社会学＝所属（メールアドレス：HCB00537@nifty.ne.jp）。

かし、以下の2つの理由で急遽活字化が望ましいということになり、本学大学院生の阿部智恵子氏の作業協力によってテープ起こしを行い、ここに掲載することとした。

掲載理由の一つ目は、研究上の価値が見込めるということである。すなわち、あの木村・市田の「ろう文化宣言」(参考文献③所収)以降、手話の言語性やろう文化の可能性に関する議論は思想界の一部では活発に語られたが、いまだ社会学においては十分な議論がなされていない。したがって、「社会学特別講義」として行われた市田氏の今回の講演の記録を公開することは、「手話」および「ろう」に関する議論の社会学的展開を導く誘い水になる可能性があると思われたのである。

掲載理由の二つ目は、教育上の意義が見込めるということである。授業終了時に学生から回収した感想メモには講演に強く触発されたことを示す記述が多かった。いわく「これが大学だと思った。ほかでは聞けない話がきけた」「初めて手話に触れた。驚いた [手話による同時通訳を行った=榎田記、以下同様=]」「実際に見たりきいたりして [手話が] 現実的な一つの言語だと納得できた」。今回の講師派遣予算は、文部省の新しい共通教育改革プログラムから支出されているが、この記録はこの予算のひとつの成功例の呈示としてもあると言えるだろう。

なお、文中の小見出しは、本紀要への掲載にあたって榎田が中心となって作成し添付したものである。また、この講義の様子はビデオテープによっても保管されている。関心を持たれた方は榎田（電話：088-656-9308=研究室直通=）までご連絡頂きたい。

【講演記録：言語としての手話・文化としてのろう】

=目次=

- 1 ろう者の手話はジェスチャーではない
- 2 脳と言語
- 3 手話は言語脳（左脳）で処理されている
- 4 言語としての手話

- 5 表情の認知
- 6 テレビの手話とろう者の手話の違い，手話研究の現状
- 7 ろう者の手話が広まらないわけ
- 8 聾学校の状況
- 9 「手話／日本語バイリンガル」教育の必要性，インテグレーション（統合教育）の危険性
- 10 サラマンカ宣言
- 11 日本語と日本手話
- 12 手話独自の文法
- 13 「手話さえ通じないろう者」という誤解
- 14 ろう者文化



■質疑応答

- ・聾学校での教育方法
- ・手話の歴史
- ・日本手話と外国の手話の違い

1 ろう者の手話はジェスチャーではない

今日はこの講義にろう者の方もみえていて、手話通訳者がついています。私自身、手話で話せますし、手話で講演することもあるのですが、その時は、手話だけで講演をします。手話で考え、手話で話すので、その時、日本語は話しません。皆さんは、例えばテレビなどで、日本語を話しながら手話をしている姿をよく見るとおもいますが、それは本来ろう者が使っている手話とは違うものです。ろう者が手話で話す時には、日本語に手話をつけているわけではありません。手話で考え、手話で話しているのです。そういうわけで、私は聴衆がろう者の場合には、手話で講演しますが、今日の皆さんのように、日本語を聞く人達には、手話をつけずに日本語だけでお話しするようにしています。

例えば、「私の名前は市田といいます」と日本語を話しながら、[私 名

前 市田 言う] と手話をつけて話すことができます。けれども、これはろう者の手話とは全く違うものです。一方、手話ではこのように表現します(手話で [私 名前 市田 言う])。皆さんには区別がつかないかもしれません。速いとか、リズムが違う、という程度の違いしかわからないかもしれません。ただし、これがもっと複雑な文になれば、違いはもう少し明白になってきます。その辺のことを今日少しでも皆さんに知っていただけたらと思います。

まず、皆さんなりの手話のイメージというものがあると思います。その典型的なイメージというのは、一つは、日本語で考えながら、そして日本語を話しながら、サインのようなものをつけていくというイメージ。例えば、「名前」という日本語には [名前] というサイン、「言います」なら [言う] のサイン、というように、何か決まったサインを並べていくのではないかというイメージがまず一つあります。もう一つは、ジェスチャーやパントマイムに通じるイメージ。[私] という手話は、自分を指差すだけ、単なるジェスチャーのようにも思える。そういうジェスチャーやパントマイムの延長としての手話のイメージというのも皆さんお持ちだと思います。

実際、私たち耳の聞こえる者＝聴者が手話を勉強する場合には、まさにそのようなイメージ通りの形でしか教えてもらえません。この単語は、こういうふうにやります、と習って、日本語で考えながら、そして日本語を話しながら、そうやって覚えた手話の単語を並べていくように教わるのです。それは、実際にろう者が使っている手話とは、全く別のものといっているくらいに違っている。そのことを今日どうやってお話ししようかと思っています。

2 脳と言語

まず、今日は脳の話からしていきたいと思います。人間の脳というのは、その部位によって非常に細かく役割が決まっています。大脳半球ということでは、言語を処理する部位というのは、左脳に大きく偏っています。もちろん、大脳半球をつなぐ脳梁という通り道を介して、情報は行き来していますし、単純にはいえないわけですが、大雑把に言うと、右利きの人の大半

は、左脳で言語を処理しているといえます。ですから、左脳を損傷した方に失語症と呼ばれる症状が現れます。右側を損傷すると、また別の症状が現われる。そういうふうに、脳のどこかを損傷すると、その部分が担っている機能が損なわれる。そうしたことから、脳のどこがどのような機能を担っているかが推測できます。もちろん、機器の進歩もあって、実験的な手法によっても、かなり細かくわかるようになってきました。

さて、そのようにして調べていくと、人間は言語音というものを左脳で処理していることがわかる。物理的な音は、音の種類にもよりますが、だいたい右脳で処理されている。つまり、人間は、同じ音であっても、さまざまな音から言語音だけを区別して、左脳で処理しようとする。人間は生まれた時から、さまざまな音の中から、言語だけを特別扱いしようとする。それは人間が人間として生きて行く上で不可欠な能力、まさに本能なのです。

それから、言語の中の情動的な情報、例えば、怒っているとか、喜んでいるということ、私たちは話している声から判断することができますが、そういった情報を読み取る作業は、右脳がおもに担っている。それから、音楽のメロディなんかは、ふつうの人は右脳で処理している（音楽家など特別な訓練を受けた人は、左脳優位だという。このように環境によって、機能が反対側の脳に転移する場合もあるので、話はそれほど単純ではないが）。一方、イントネーションの言語的機能やトーン（声調）、中国語などの場合には、同じ発音でも声調が違うだけで違う単語になりますね、そういう、声の高低が言語的に機能する場合には、おもに左脳で処理しているらしい。同じように音の高低を使っている、メロディは右、トーンは左と、脳の中で処理される場所が違うわけです。

3 手話は言語脳（左脳）で処理されている

そこで、手話の場合はどのように処理されているのか、ということが問題になります。まず、手話ではなく、一般的に人間の空間認知、ものの形、ものの位置関係、そういうものを捉える作業というのは、おもに右脳でやっています。それから、その人が誰だかわかる、つまり顔の造作から、その人が

誰であるか判断できる，という能力も，右脳に依存しています。さらに，顔の表情を読み取る，悲しそうな顔とか，楽しそうな顔というのを認知するのも右脳です。

手話について調べていくと，非常に意外な結果が出てきます。まず，ろう者が失語症の症状を示す，という場合があります。子どもの頃から手話をずっと使ってきた人が，左脳を損傷したとします。手話の手の動きというのは，手の形や位置関係から成り立っているし，手話の中では顔の表情がよく使われます。ものの位置関係や，顔の表情というのは，右脳で処理されているわけですから，左脳を損傷しても手話には影響がないと思われるかもしれませんが，なんと左脳を損傷したろう者は，やはり「失語症」になるのです。手話の失語症です。興味深いのは，その人は，身振りやパントマイムは理解できるのに，手話だけがわからなくなる。逆に，右脳を損傷したろう者は，身振りやパントマイムが理解できなくなっても，手話は理解できるのです。実際にそれがどういうことなのかを想像するのは難しいことかもしれません。とにかく，同じ手の動きや表情というものを媒体にしているにも関わらず，人間は，身振りやパントマイムと手話というものを，全く別のものとして脳の中で処理しているということなのです。これは非常に意外なことかもしれませんが，考えてみれば，人間が音声について，物理的な音や，メロディを理解したり，声の調子から感情を読み取ったりすることと，音声言語を理解することを，別のものとして扱っていることと，全く平行した現象なのです。

では，ものの位置関係を認知する能力を失った人が，手話がわかるというのはいったいどういうことなのでしょう。手話というのは，手の動きから成り立っています。動きというのは，形や位置関係の変化のことです。形や位置関係がわからない人が，どうして手話の動きならわかるのか。手話を知っている人は，手話を単なる手の形や動きとして見ているわけではない，ということでしょう。音声言語を聞き分けるには，単なる音としてではなく，音の中から言語的な要素を取り出して聞かなくてははいけない。私たちが知らない外国語を聞く時，音としては聞こえても，言語としては聞こえてこない

という経験をする。それは言ってみれば、右脳には聞こえていても、左脳で処理するには聞こえていないというようなことなのかもしれません。同じことは手話にも当然起こります。手話の手の動きは、誰にでも見えるけれども、それが手話として見えるということは、全く別のことなのでしょう。

4 言語としての手話

手話の手の動きが見えることと、その手の動きが言語として処理されるということの間には、非常に大きな距離がある。逆に、手の動きを動きとして処理することのできない右脳損傷者が、手話を言語としてなら処理できる、というのはいったいどういうことなのでしょう。手の動きを動きとしてでなく言語として見ているとして、じゃあ、いったい何を見ているのでしょうか。実はこのことについてはよくわかりません。

例えば、「秋田県」の「秋田」という手話単語があります。手話の講習会で手話を学ぶと、その単語は、このような形（図1）だと教わります。語源



図1

図2

図3

の説明がつく場合には、

「秋田」は「落」から来ていて、左手が「落の葉」で、右手が「茎」だというような説明をされます。手話を勉強する人は、「秋田」という単語はこういう形か、と覚えるわけです。右手と左手の形と、その位置関係、ということで覚えます。ところが、実際にろう者が手話で話す時には、「秋田」という単語は、こういうふうにも（図2）こういうふうにも（図3）表されます。

「秋田」には、図2のような形も、図3のような形もある、という理解では

ないんです。極端な話、図1の[秋田]も、図2の[秋田]も、図3の[秋田]も、みんな同じ手話に見える。つまり、手の形や位置関係がどうであれ、[秋田]は[秋田]なのです。じゃあ、何をもって[秋田]と認識したのか。おそらく、このように構えた手の甲に、動く側の手の親指の先端が触れる、ということだけが必要な情報で、それ以外の手の動き、位置関係に関する情報、例えば、左手の手のひらが上を向いているとか、右手の上に左手がある、というような情報は、左脳では処理されていないんだと思います。とにかく、少なくとも手話を見る人は、手話の形を、「こういう形」というような形で全体的に捉えているのではないのだろう、ということだけは言えます。

これは、例えば、日本語しか話せない人にとっては、[ʌ]も[a]も[æ]もみんな「あ」に聞こえる。でも、それぞれの音は、本当はとっても違っている。英語では別々の音として扱われているくらいです。でも日本語としては、同じ音に聞こえる。つまり、「あ」という音が聞こえてきた時に、音を単に音として聞いているのではなくて、言語音として処理する限り、[ʌ]も[a]も[æ]もみんな同じに聞こえるような処理の仕方をしている。そのことと、いろいろな形の[秋田]が同じに見えるということは、平行しているのだと思います。

5 表情の認知

次に、表情の認知について考えてみます。感情的な表情、うれしそう、悲しそう、驚いている、といった顔の表情は、ふつう右脳で処理されますね。これが、ろう者の場合、どうなるか。このことについては、ある実験報告があります。手話の中で言語的な表情として使う表情だけれども、手話を知らない人が見れば感情的な表情ともとれるような表情を、被験者に見せるんです。その時に、左脳と右脳のどちらで処理しているかを調べる。そうすると、手話を知らない人は全員右脳でその表情を認識している。ところが、聾者はほぼ全員が左脳でそれを処理しようとするというのです。そのほか、脳損傷者にも、こうしたことを裏付ける症例がある。例えば、右脳損傷者で、相貌失認という症状に陥ったろう者がいます。相貌失認というのは、人の顔を見

ても誰の顔だかわからなくなってしまうという症状です。人の顔の区別がつかないろう者が、手話の中で表情だけで意味が変わるような文をなんとなく理解する。表情や人相を認識する部位が損傷して機能しなくなっても、手話の理解は損なわれないのです。

手話の中で表情を「言語として」使うということはどういうことでしょうか。ここで、手話の文を表現してみます。表情というより頭の動きといったほうがいいかもしれません。表現される単語は一つだけ、[田中]という単語でやってみます。(3通りの表現を実演)

この三つの手話文は、手指で表された単語は同じですけれども、表情、頭の動きの違いから全く違う三つの文になっています。日本語でいえば、「田中さんです」「田中さんは?」「田中さん?」の三つの文に対応します。「田中さん?」というの、田中さんかどうかたずねる文ですが、「田中さんは?」という、この「は」があるかないかで日本語は全然意味が違ってくる。「田中さん?」という質問には、「はい」とか「いいえ」で答えられます。イエスかノーで答えられる。そこで、こういう疑問文をイエスノー疑問文といいます。「田中さんは?」の場合は、「田中さんはどうした? どうする? どこ?」といった質問ですから、イエスノーでは答えられない。こういったタイプの疑問文をWH疑問文といいます。日本語は、平叙文と疑問文はイントネーションで区別できますが、疑問文の中の二つのタイプは、イントネーションでは区別ができない。「は」の有無で決まってくるのです。でも、手話はこの二つのタイプの疑問文までイントネーションだけで区別できる。

「は」という助詞がないかわりに、別の方法で区別しているわけです。今、手話のイントネーションと言いましたが、顔の表情(の一部)や頭の動きというのが、音声言語のイントネーションにあたりとされているのです。そして、先程言ったような相貌失認が起こったら、人の顔の区別ができなくなるにも関わらず、今見ていただいた顔の表情、この三つの表情をなんとなく区別することができるわけです。

手話は、イントネーションの役割がとても大きくて、というのも、この手話の表情、あるいは頭の動きというのは非常にバリエーションが多いので

す。音声言語のイントネーションでは、日本語ならせいぜい、「田中（平板＝平叙文）」のほかに、「田中？（上昇調＝質問）」、「田中…！（上昇下降調＝驚き）」、「田中…？（下降上昇調＝不審）」と、せいぜい3通りのイントネーションしかありませんが、手話は、表情は抜きにして、頭の動きだけでも計算上は88通りの動きがあり得る。これに表情が加わるのですから、ものすごくバリエーションが多い。そういうこともあって、イントネーションが非常に大きな役割を担っているのです。

例えば、「田中さんが来る」という文と「鈴木さんが来る」という文をつなげた場合、二つの文の関係も、イントネーションによって示されます。実際に表現してみます。単語は、[田中 来る 鈴木 来る]の4語だけです。

（5通りの表現を実演）

この5つの文は、並んでいる単語は同じで、イントネーションだけが違うのですが、すべて意味が違ってきます。ここで起こっている頭の動きを図に示します（図4）。手話では、ちょっとした頭の動きの違い、表情の違いで、二つの文の関係が示されるんです。

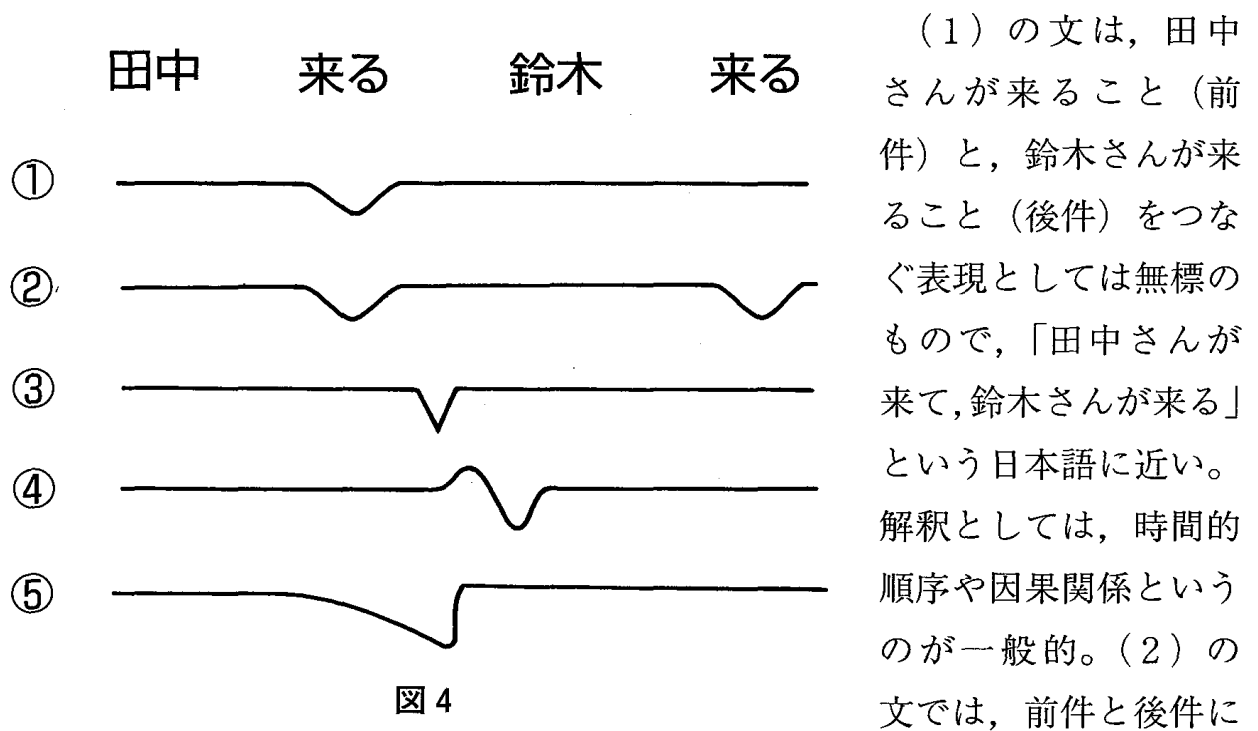


図4

対等な関係がある。日本語で言ってみれば、「田中さんも来るし、鈴木さんも来る」というような意味。(3) の文は、時間的なことであれ、因果関係

であれ、前件と後件にきわめて密接な関係があるという意味で、日本語でいえば、「田中さんが来ると同時に、鈴木さんが来る」、「田中さんが来るからこそ、鈴木さんが来る」、あるいは、「田中さんが来ると、必ず鈴木さんが来る」というような意味です。(4)の文は、接続部が独立していて、(3)が接続助詞的だとしたら、(4)は独立した接続詞のような感じですが。「田中さんが来て、それから、鈴木さんが来る」「田中さんが来る、だから、鈴木さんが来る」といった感じでしょうか。そして最後の(5)は、ちょっと特別で、「田中さんが来るなら、鈴木さんが来る」という、いわゆる仮定・条件です。

6 テレビの手話とろう者の手話の違い、手話研究の現状

日本語であれば、接続助詞とかを使って文をつなぐところを、手話ではイントネーションだけで表現する。なぜ、そんな微妙な頭の動きや表情の変化だけで、理解できるのかということ、それはやはり左脳で処理されていることと関係があるのでしょう。

ちなみに皆さんがテレビドラマなどでよくみかける手話の場合には、こういう微妙な頭の動きは全く見過ごされています。全然イントネーションがないか、全くでたらめな変なイントネーションがついているか、いずれにしろ、ろう者の話す手話とは似ても似つかない。単語だけは並んでいるけれども、文の構造については何も伝えていない、そういう手話なんです。もちろん、それはテレビドラマの制作者が悪いのでも、俳優が悪いのでもない。誰も知らないんですから。研究者でさえ、手話の言語の構造において、頭の動きや表情がきわめて重要な役割を果たしているということに気づいたのは、ここ20年のことです。日本ではそもそも手話を研究している研究者自身がそんなにいない。手話の周辺に関わる研究をしている人はそれなりにいても、手話そのものを研究している人は、私を入れても5本の指で足りてしまう。ろう者自身もまさか自分たちの頭の動きにそんなに深い意味があるなんて思ってもみない。ろう者にとっては当たり前すぎて、逆に気づかないことなんですね。

それじゃあ、テレビドラマの手話はろう者には全く理解できないか、とい

うと、それなりに理解できる面もある。それは、単語の羅列だけでも、それなりに解釈はできるということもあるし、微妙な頭の動きの代わりに、誰にでもわかるような別の手段を使って補ったりしているからです。例えば「田中さんが来るならば」なら、「ならば」のところで、[例えば]という単語を使ったり、「～時に」なら、[時]、「～後に」なら[後]のように、誰にでもわかりやすい単語を使う。ろう者もそれらの単語を使わないわけではないけれども、その場合でもろう者は必ず、その接続詞的な単語とともに適切なイントネーションをつけて話すんです。そのイントネーションこそが、文の構造を示している。それが、テレビの手話などでは決定的に欠けています。

今日、手話については社会にずいぶん知られてきたけれども、ろう者が手話の中でそういう微妙な頭の動きや表情というものを「言語的に」使っているということはほとんど知られていない。手話は単語の羅列に過ぎないと思われています。その単語も一つ一つばらばらに並んでいると。これは、単純な文を使って、単語ごとに区切り、日本人にわかりやすいように発音した英語しか知らないという状態みたいなもので、そういう人がネイティブの英語を聞いても、なんにもわからない。それと同じで、[秋田]という単語を「こういう形をしている」と教わっても、実際ろう者が手話の中で[秋田]とやるのとは、全く別のことでしかない。手話を本当には知らない人に、言語としての手話は決して見えないのです。

7 ろう者の手話が広まらないわけ

さらに厄介な問題があります。ろう者は、聴者に対しては、自分たちの手話で話しかけようとしません。昔、日本人というのは、外国人が「ちょっといいですか？」みたいに日本語で話しかけてきても、「ノーノー」とか答えたりした。今はどうかかわからないですが、私たちの世代というのはそういう世代です。向こうが日本語を使っているんだから、日本語で答えればいいのに、相手が外国人だということで、どうしても「アイ・キャント・スピーク・イングリッシュ」とか英語で答えなければいけないような気がしてしまう。そういうのと、ちょっと似ているかもしれません。ろう者は、聴者が

たとえ手話を勉強して手話で話しかけても、決していつも自分たち同士で使っている手話では答えてくれない。一語一語区切って、イントネーションなんかわからなくても何とかなるように、誰にでもわかりやすい表現で、さらには日本語の発音をつけたりしながら、手話をする。だから、手話を勉強する人は、ろう者が自分に話しかけてくることはある程度理解できても、ろう者同士が話していることは全く理解できない、という状況になる。

もう一つ厄介なことは、手話を使う耳の聞こえない人たちというのは、子どもの頃から手話を使ってきた人ばかりではない、ということです。中途失聴者や難聴者と呼ばれる人たちは、大人になってから手話を使うようになった人たち。だから、当然、手話の使い方が子どもの頃から手話を使っている人たち、ろう者とは違ってきます。もちろん、その人たちにとっても、手話は非常に有効な手段です。なぜなら、口の動きから相手の話を読み取るということは、大変困難なことだからです。例えば、タバコとタマゴだったら、口型は全く同じです。日本語の音の種類は110種類くらいですが、口型の種類は16種類くらいしかありません。多くの語で口型が同じになってしまう。となると、後は文脈から類推するしかありません。日曜日の午後にお父さんが「タ×コ買って来い」といったら「タバコ」だろうと。でも、もしかすると、その日はお父さんが突然思い立って、「今日の晩飯は俺が作る」とか思って、「タマゴ」を買いに行かせたかったのかもしれない。類推には限界があるのです。しかも、それがコミュニケーションの間じゅう延々と続くのです。そんな時、「タ×コ」という口型に、手話単語の「たばこ」や「たまご」がついていたら、どんなにありがたいか。口型を読み取る負担や、類推に頼る割合をぐっと減らせるのです。それはそれで非常に有効なのだけれども、そういう意味での手話の使い方というのは、さっきから話している、ろう者が日常使っている手話というものからはとても遠いところにある。あくまでも日本語の補助手段として使われるに過ぎないわけです。それに対して、ろう者の手話は、日本語とは全く異なる構造をもった独自の言語なのです。

ところが、手話を知らない人から見れば、どちらも同じようなものに見えてしまう。だから、手話は社会に広まったけれども、その中で伝わったのは、

日本語の補助手段としての手話だったりするわけです。ろう者がふだんろう者同士で使っている手話については、ほとんど何も伝わっていないという状況があるのです。

8 聾学校の状況

さて、先ほどから、ろう者は子どもの頃から手話を使ってきた、と話してきましたが、実は、ろう者が子ども時代を過ごすろう学校では基本的に手話を使いません。手話はひどい場合には禁止、よくて黙認で、積極的に認められるということはまずありません。なぜなのか。このことをお話するのは簡単ではありませんが、誤解を恐れずに少し単純化してお話しましょう。まず、手話が言語であるとは誰も思っていない、ということ。それが一番大きい。ろう学校関係者は、手話が言語であるということを知りません。最近、そういう学校関係者に対する啓蒙というか、講演や研修会に呼んでもらったりしていますが、それでわかってもらえるかどうか。今日も1時間皆さんにこうしてお話しているわけですが、皆さんの中のどれだけの人が本当に手話は言語であるということを理解してくれるのでしょうか。手話は言語であるという言葉の意味は、手話は、日本語や英語、フランス語や中国語など、あらゆる言語と同等の構造をもつ言語であるということ。そういうことを皆さん信じてことができますか。そういうわけで、ろう学校の先生方、教育関係者も、手話が言語であるということを知らないのです。

そういう中で、ろうの子どもの教育をしている。ろうの子どもは、耳が聞こえないので、音声言語を自然には習得できない。先ほどお話したように、人間はあらゆる音の中から言語だけを特別扱いする、そういう本能をもって生まれてくる。だから、私たち耳の聞こえる者は、家族や地域社会が話す日本語を自然に習得してしまう。ところが、耳の聞こえない子どもの場合は、その音が入ってこないから、その自然に起こるはずのことが起こらない。そうすると、親はまず子どもを病院に連れて行く。耳が治るか治らないか。治らないとなれば、なんとか音声言語を話せるように訓練しなければならない。けれども、そういう訓練の中で与えられる言語は、耳の聞こえない子ども

もたちから見ると、あまりに不完全なものです。先ほどお話したような、類推を重ねなければ理解できない代物です。一方、ろうの子どもにだって言語を特別扱いする本能がある。それは何も「音」でなくてもいい。それが視覚的なものでも、子どもにとって特別扱いするに足る言語であれば、子どもはそれを自然に習得する。それが手話なのです。子どもは自分の周囲に手話があれば、私たちが周囲に日本語があったから誰に教わるでもなく自然に日本語を習得したように、自然に手話を習得します。子どもが手話を好むことは、ろう学校の先生たちもよく知っています。子どもは手話があればすぐに興味を示し、あっという間に習得してしまふ。でも、そうなったら、子どもは大変な苦勞をして音声言語を身につけるということを避けるようになってしまふかもしれない。つまり、子どもに手話を使わせることは、安易な方法だと思われているのです。そして、その手話はまともな言語であるとは考えられていないのですから、手話のような不完全なものを与えることは、教育上困ったことであると考えられるわけです。手話では思考が十分に発達しないと、まじめに思っている人たちがたくさんいます。そのように思っている人たち自身は、手話については何も知らないのです。いや、手話について自分では知っているつもりなのかもしれません。手話単語もたくさん知っていたり。でも、今日お話したような、ろう者同士の手話の、[秋田]という手話が認知されるプロセスに見るような言語特有の構造、それから、豊富なイントネーションによる文と文の連結といった言語としての構造、そういう手話の真の姿は、全くといっていいほど知らないのです。

そうやってろう学校の教育というのは行われている。でも、いくら学校の先生が使わなくても、また、学校の先生の指導にしたがって親が使わせないようにしても、手話というものは、ろうの子どもたちが集まれば、必ず存在するのです。それは言語というものをあらゆる刺激の中から取り出して特別扱いしないであらぬ人間の本能だといってもいい。ろうの子どもは、上級生が手話を使っているのを見れば、それを習得してしまふ。そうやって、手話は基本的に子ども集団の中で先輩から後輩に伝えられていくのです（家庭内で手話習得のチャンスがあるのは、両親もろうである場合だけですが、

そういう子どもは、ろうの子どもの1割程度とされています)。だから、ろう学校がもっと徹底して手話を禁止していた時代には、手話を使う上級生と接触させないように、上級生と下級生で朝礼を別にしたり、運動会まで別にするということがまじめに行われていたのです。さすがに今はそこまで露骨にやるというのはなくなってきましたが、基本的に手話は相変わらず認められていない。

そういうろう学校の状況というのは、手話を話す生徒たちの前に、手話を知らない先生が立っている、という状況です。先生の中には手話が必要だと思って手話を学ぶ人もいますが、直接生徒たちから学ぶか、ろうの大人たちの社会に入り込んで、ろう者同士の手話を理解できるようになるまでがんばるかしない限り、生徒たちが使っている手話とは似て非なるものしか使えない。生徒たちのほうも、先生に対しては、生徒同士で使っている手話を使おうとしない。だから、先生は生徒同士の話がわからない。これは考えてみれば、すごい状況です。生徒の言葉がわからない状況で教育をやっているのですから。それなのに、このことがあまり問題にされないのは、生徒同士の手話というのが、言語といえるようなものではないと考えられているからでしょう。生徒が何を言っているのかわからない、という時に、彼らの言葉を自分たちが知らないからわからないのだ、と思わずに、彼らの能力が低くて、うまく伝えられないのだ、そもそも彼ら同士本当に通じ合っているのかも怪しいと、まじめに思ってしまうのです。この問題は非常に根が深いです。

そうやって、手話を使わない、使わせない教育をやっていくと、どうなるか。なんとか音声日本語だけで授業をやっていくことになる。けれどもそれはとても難しい。そもそも音声日本語自体、習得が難しい。教科教育が始まる小学1年までに、日本語をしっかり身につけて、それをもとに学力を身につけるということになっているけれども、実際には日本語がきちんと身につかない。そうなると、もっと日本語を、ということになって、教科教育がどんどん遅れていきます。中学を終える段階で、小学6年の教科書をやっていたりする。遅れているだけでなく、中身も伴わない。日本語の力が十分でなく、学力もつかないということになってしまうわけです。現在

ろう者の多くは読み書きも十分でない、学力もとても大学などを受けるレベルに達しない。全く不十分な教育しか受けることができずにいます。

9 「手話／日本語バイリンガル」教育の必要性、 インテグレーション（統合教育）の危険性

ただ、ここで忘れてほしくないのは、そういう教育の問題はあるけれども、じゃあ、ろう者が人間として成長できていないかということ、そういうことではない。皆さんの人間としての成長を本当のところ支えていたのは何だと思いませんか。学校ですか。もちろん、学校や親の影響も小さくありませんが、一番大きい影響を受けているのは、たぶん、自分が属していた集団、子ども集団や年齢の近い仲間たちだったのではないのでしょうか。ろう者を孤独な存在とみなす偏見がありますが、ろう学校の生徒たちは決してひとりぼっちではありません。仲間たちと子ども時代を過ごす、ふつうの子どもたちです。そして、その仲間たちは、手話を使う仲間たちなのです。子どもたち同士で手話という言語を共有する中で、人間として成長していく。そういう意味でも、彼らにとって、ろうの友達はかけがえのない存在なのです。もちろん、日本語力の問題、学力の問題は深刻です。これに対しては、ろう者は手話を使った教育をしてほしいと訴えています。手話を第一言語とし、それを基盤に日本語を第二言語として学ぶ、バイリンガル教育というのが、多くのろう者が望んでいる教育です。現状では、子どもたちが共有している言語を、教える側は無視するか、黙殺するか、見過ごしています。子どもたちが共有している言語こそを教育の基盤にすえて、その上で教育を考えるということです。そこでは、ろうの子どもたちが、仲間たちと出会うこと、そして、ろうの大人たちに出会うことが大切です。そのためには、ろう学校の存在が欠かせません。もし、ろうの子どもをろう学校に通わせないとすれば、これはとても深刻な状況を生みます。インテグレーション＝統合教育、つまり、普通校で障害者を教育するということが、社会的にとっても強調されています。けれども、そういう教育はろう者にとってどんな意味をもつか。それは彼らから同じ言語を共有する仲間を奪うことになるのです。音声言語の自然な習得

が困難な子どもたちに訓練や教育によって日本語を与える、そういう試みは、手話を使わずに自然なコミュニケーションを制限する方法では、失敗することも多かった。そういう失敗が、日本語力や学力を奪う一方で、子どもたち集団と、その集団が共有している言語＝手話は、子どもたちの人間としての成長を支えてきたのです。子どもたちを仲間集団が救ってきたのです。インテグレーションは、そういう環境から子どもたちを切り離してしまう。非常にリスクが高い環境だといえます。ろう者が望むのは手話を基盤に日本語の獲得をめざす「手話／日本語バイリンガル（二言語）」、それに対して、これまでろう教育は、日本語にこだわり、手話を排除するわけですから、「日本語モノリンガル（一言語）」なわけですが、その中で育ったろう者たちは、逆に、十分な日本語力を持たず、けれども、子ども集団の中で習得した手話によって人間としての成長を支えられてきた。そういうたくさんの「手話モノリンガル」がいます。インテグレーションは、手話習得のチャンスを奪うという意味で、究極の「日本語モノリンガル」をめざすということです。そこで、もしも日本語の獲得に失敗すれば、そして、その確率はこれまでの経験からいって決して低くないのですが、その子どもは日本語も手話も十分には習得できない「セミリンガル（一つも確かな言語をもたない状態）」になってしまう。これは非常に深刻な問題です。言語だけの問題ではありません。人間は言語を共有することで社会の一員になっていく。言語を共有できないということは、一人前の社会の一員として認めてもらえないということです。だから、バイリンガルがバイカルチュラル（二文化）なら、セミリンガルはセミカルチュラル（文化がない状態）なのです。社会性というものを身につける場、人間としての成長を支える場を奪われてしまうということです。

10 サラマンカ宣言

このことに関連して、国連が障害者教育の指針というのを出しているのですが、その基本はインテグレーション、障害者であっても地域の健常者と一緒に教育を受けるべきだ、というものです。けれども、その指針を「サラマ

ンカ宣言」という形でまとめる時に、世界ろう者連盟が活発なロビー活動をして、自分たちの後輩たちであるろうの子どもたちを同じろう者同士の集団から切り離すことに徹底的に反対したのです。そしてやっとの思いで、その宣言の中に、「手話の認知」「手話で教育を受ける権利の保障」に加えて、「ろう者や盲ろう者は特殊なコミュニケーションのニーズを持っているため、その教育は特殊学校や普通校の特殊学級で行われる方が、（そのニーズに）適した教育が施されるかもしれない」という一文を入れることに成功した。このことについては、日本ではほとんど知られていません。国連が、障害者教育について基本的には普通校でという将来像を示す中で、ろう者だけは例外かもしれないという注釈をつけた、また、その注釈がろう者自身の運動によって付け加えられた、ということの重みを、皆さんに知ってほしい、そして考えてほしいと思います。

11 日本語と日本手話

さて、先ほど、バイリンガルはバイカルチュラルだ、という話をしました。手話という日本語とは違う言語を話す人たちという見方から、違う文化をもつ人たち、異文化としてのろう者という視点が出てきます。そうすれば、これまでとは違ったろう者に対する見方が可能になります。ただ、文化の話に入る前に、もう少し、言語の話をしておきたいと思います。

手話は日本語とは違う言語なのだ、という時、ではそれは全く無関係なのか、これは文化にもいえることですが、同じ日本に生きていながら、どれほど違っているのか、という疑問があると思います。もちろん、言語というものが他の言語から全く影響を受けないというのは、完全に自給自足できる環境にある孤立した民族でも存在しない限り、ほとんどあり得ないことです。日本語も、ずっと長い間中国語の影響を受けてきて、近代に入ってから英語の影響を強く受けるようになりました。でも、その影響がどんなに大きくても、もとの言語を話すことをやめて、別の言語を話すようになるというのでない限り、その言語の独自性というのは失われることはありません。言語間の影響というのは、おもに単語のレベルで起こります。もちろん、翻訳調

とか漢文調といったものに現れるように、文法レベルでも影響は受けますが、基本的には単語レベルです。単語レベルでどんなに影響を受けても、言語の根幹というのは文法ですから、独自性が失われることはない。日本語でいえば、例えば、「ファッショナブルなウェアで、ウィンタースポーツをエンジョイ！」と言った時、単語はすべて英語から持ってきたものですが、これは間違っても英語ではない。まぎれもなく日本語です。カタカナ語がどんなに増えたって、日本語は英語になってしまったりはしない。手話も同様です。手話は日本語の影響を強く受けています。けれども、手話独自の文法がある限り、手話は決して日本語になってしまったりはしません。

12 手話独自の文法

手話独自の文法の例をもう少し紹介できたらよいですね。一つだけ紹介しましょう。先ほど、頭の動きや顔の表情というお話で一部文法的な違いというのを紹介しましたが、ああいうものだけだと思われても困るので、機能語的なものを一つ紹介しましょう。

機能語というのは、実質語＝内容語のような実質的な意味・内容を担う語ではなくて、文を組み立てるための道具になる語のことです。日本語で言えば、助詞や助動詞などがその典型ですが、実質語が同時に機能語としても使われている場合もあります。例えば、日本語の「もの」なんていう単語は、「私のもの」とか「いろいろなもの」とか言う場合には実質語ですが、それが、「あの頃はよく〇〇したものだ」というふうに使われれば、これは文全体を「過去の習慣」を示す文にするための道具ですから、機能語です。「こういう時にはこうするものだ」みたいな使い方も機能語としての用法ですね。英語だったら、「もつ」という意味の「have」が「have to」となれば助動詞の「must」と同じ機能語になるし、「使う」の「use」が「used to」となれば「過去の習慣」です。このように実質語が機能語として使われる。助詞や助動詞のような典型的な機能語も、もとはといえば何らかの実質語であったものが変化したと考えられるのですが、それにはやはり時間がかかるようで、歴史があまり長くない手話の場合は、たいていの機能語は実質語として

の用法ももっています。

この単語（右手の親指を立てて右胸に当て、下に向けてこする）はふつう「飽きる」という意味だと紹介される単語です。実際には「やっても無駄だから、あるいは意欲がないから、やらない、やめる、やってみたが無駄だった」というような意味をもつ語です。この語が機能語的に使われる文があります。同じ単語列で、二通りの文をやってみます。（二通りの表現を実演）

単語は、[(彼に) 話す わからない 飽きる]です。単語列からは、何のことかわからないと思います。二つの文は、頭の動き、表情に加えて、視線がどう動くか、ということで違ってきます。一つめは「どうせ話しても彼にはわからない」、二つめは「いくら話しても彼はわからなかった」という意味です。

[(彼に) 話す] の部分を [A]、[わからない] の部分を [B] とすれば、これらの文は、[A B 飽きる] という形になっている。で、それを日本語にすると、「どうせ A しても B だ」と「いくら A しても B だ」という意味になる。後ろにさらに [C] の部分をつけて、[待つ 来ない 飽きる 帰る] とやれば、「いくら待っても来ないので帰った」、すなわち「いくら A しても B なので C した」という文です。「飽きる」という語はまさに、日本語の「どうせ」とか「いくら」にあたるような、文を組み立てるための道具になっている。または、イディオムという言い方もできるでしょう。英語の「so~that~」とか、「too~to~」とかみたいに、[A B 飽きる C] という表現が存在する。本当の意味の手話の辞書というものがもしあったなら、「飽きる」という単語を引くと、「飽きる」「あきらめる」「やめる」「やらない」「無駄」「がっかり」といったさまざまな意味の記述があって、最後にイディオムとして [A B 飽きる] とかが、載っている。そういう記述があってこそ、辞書といえるはずですが。現在たくさんの「手話辞典」なるものが出されていますが、それらはすべて辞書と呼べるような代物ではありません。この単語には「飽きる」という見出し語がついて、それで終わりです。単語の意味も用法も何も書いてない。それは辞書を作る人の怠慢というよりも、手話という言語が外国語のようなものだという認識そのものが欠けているのです。この単語

は、「飽きる」という意味の単語なんだと、信じて疑わないのです。

ろう者自身、ろう者同士では当たり前のように使っているけれども、うまく日本語で説明できないから、聴者にはこういう単語は教えない。だから、手話を勉強する人達も、この単語がそんなふうに使われているなんてことは全く知らない。私自身、かつて手話を習いたての頃、聴者の手話の先生に『『どうせ』ってというのはどうやるんですか』って聞いたことがあるのを覚えています。その時、先生はこう答えました。「手話にはそういうのはないなあ」。たしかに日本語の「どうせ」と同じものはない。でも「どうせ～しても～だ」というのにあたる表現は、日本語とは全く別の形で手話の中に存在するんです。

ろう者同士は、日本語と大きく隔たった手話の表現が、聴者にはなかなか理解されないことをよく知っています。だから、教えようとしなくて、聴者相手には使うこともしない。困ったことに、ろう者自身、聴者に通じないような手話というのは、でたらめな手話なんだと誤解してしまっている面がある。手話という言語に自信がもてないでいるのです。なにしろ、ろう学校に在籍している時から、一度も公式には認められたことのない陰の言語なのです。だから、手話がもつ豊かな表現を教えようとしなくて、というのではなく、教えるほどのものではないと思っていると言ったほうがいい。

13 「手話さえ通じないろう者」という誤解

ろう者は手話ができる聴者に対してさえ、本来自分たちが使っている手話で話していない。別のものを使う。それはたいてい彼らの事実上の第二言語であり、多くの場合十分に習得できていない日本語を基盤にしたものとなる。そうすると、どういうことが起こるか。ろう者は自分たちが本来持っている能力を十分に発揮できないということが起こるのです。手話で話せば簡単にいえることが、うまく話せない。手話でなら豊かに表現できるのに、きわめて貧弱なことしか言えない。ろう者はそうやって能力を不当に評価されることになるのです。じゃあ、自分たちの言語で表現するとどうなるかというと、手話を知っているつもりで聴者たちによって、また誤解されてしまう。

ろう者の手話を知らない人が、[話す わからない 飽きる]という文を見ても、なんのことかわからない。いや全然わからないならまだいいのです。その人は手話の単語は知っているし、手話について知っているつもりでいるわけですから、「話す わからない 飽きる」っていう支離滅裂な文として受け取ってしまう。手話が広まることは非常にいいことなのですが、いいことだけではない。そういうふう到手話を知ったつもりになっている人をたくさん作り出しているという側面もある。「あのろう者は何かを言おうとしているけど、私にはわからない」というのと、「あのろう者はあの程度のことしか話せない」と誤解するのと、どちらがましか、これは厄介な問題です。手話を学んだ人がろう者に何かを伝えようとする時にも同じです。手話を学びたての頃の私がそうです。「どうせ」というのは手話にはないと思っているから、「どうせ～しても」というのを、適当にこう口をパクパクさせて、「いくら話してもわからない」も「どうせ話してもわからない」も、ただただ[話す わからない]という単語を並べて繰り返すだけ。そうするとろう者にはうまく通じないことも多い。そうすると今度は、ろう者は手話さえ理解できない、手話さえも通じない、なんて思ってしまう。自分たちの手話がろう者たちの手話と違っているということに気づいても、向こうが本当の手話で、こっちが間違っているなんて思いもしない。(皆さんは世代が違うので知らないかもしれませんが)昔、ソニーのテレビコマーシャルで、日本人が外国人に向かって、自社の製品名のカタカナ語を言わせようとするというのがありました。日本人はジャパニーズイングリッシュで手本を示す。外国人はそれに対してちゃんとした英語の発音で答える。何度かやらせた後、日本人がこういうのです。「おまえ英語下手だなあ」。ちょっと正確なせりふは忘れましたが、だいたいそんな内容のCMです。私たちはこのCMを見て笑います。でも、これと同じことが手話を学習する世界では起こっているのです。ろう者の手話を聴者が、それは間違っている、それじゃあわからない、といって直すなんてことは日常茶飯事です。それが英語ネイティブの人に向かって、あなたの英語は間違っているというのと同じなのだということに気づかない。これはとても笑い話ではすまされない。手話が広まるという一見すば

らしい状況の中で、そういうことが起こっているということを、私たちは知る必要があります。

ろう者は手話という言語を共有するろう者社会の一員として生きている。ところが、私たちの眼には、その社会が見えず、たった一人の孤独なろう者のように見えてしまう。手話という言語をもつ人としてではなく、不十分な日本語しかもたない人として扱われてしまう。例えば、知能検査みたいなものでもそうです。私は英語ができません。もしアメリカで知能検査のようなものを受けることになって、すべての検査が英語で行われるようなことがあったら、私の能力は不当に低く評価されることになるでしょう。その結果は私の英語の力を示しているとは思いますが、私の人間としての能力がそれで判断されたらたまらない。ろう者はそういう検査をたいてい日本語で受けさせられるのです。その検査結果は彼らの日本語の力を反映しているかもしれないけれど、彼らの知能や人間としての能力を示すものではない。もちろん、知能検査が人間としての能力を示せるかという問題はあるのだけれど、ここでは一つの事例として聞いて下さい。ここでも、じゃあ、手話通訳をつけなければいいかという、これがまた問題になる。ろう者の手話を十分に理解できない人が通訳をすれば、逆に通訳をつけたのにこの程度、っていうことになりかねない。非常に重い問題です。

14 ろう者文化

彼らが日本語とは異なる言語＝手話をもつということは、彼ら独自の文化をもつということでもあります。そういう視点から、ろう者という存在を見つめ直すことの可能性については、これまでの話でだいぶわかっていただけだと思います。最後に、ろう者文化というものを具体的に取り上げて、もう少しお話したいと思います。ろう者は直接的な表現を好み、遠まわしな表現を嫌います。彼らとつきあっていると、そういう価値観の違いのようなものを感じます。ところが、聴者からは、遠まわしな表現が理解できないとか、妙にストレートな言い方をして失礼なやつだと、一方的に評価される。でも、ろう者の社会の中では、そのままストレートに表現するのが、常識的な行動

なのです。私が手話を勉強して、ろう者の社会に入っていくと、はっきりものを言わない卑怯なやつ、結局何を言いたいかわからないあいまいなやつ、ということになる。そういう相対的な視点でもって、文化の違いとしてとらえれば、ろう者観というのはかなり違ってくる。ろう者は頑固だとか、柔軟性を欠くとか、専門家と呼ばれる人達が「ろう者の心理」などといって、もっともらしく指摘してきました。たしかに、ろう者は先にきちっとものごとを決めてから、何かに取り組むということが多くて、あいまいなまま進めるということをととても嫌がる。決めたことを途中で簡単に変更したり、これからどうするのがおいおいわかる、なんていうのを嫌がる。こういうのは、まあ柔軟性を欠くといえなくもない。でも、そういう見方も一方的なものにすぎない。聴者がろう者の中に入っていけば、すぐにわかる。聴者は、何事もあいまいなまま進めようとする。責任の所在がはっきりしない。実にいいかげんだ。ろう者から見れば、聴者は無責任この上ない。この「責任」というものに対する価値観が、ろう者と聴者では決定的に違っているのです。ろう者は、責任の所在をはっきりさせようとする。自分に責任のあることと、ないことを明確に区別する。だから、私が「どうしようかなあ」とか言うと、「私は知らないよ」とか「自分で決めなよ」とかろう者は言う。これは聴者が期待している答えとは違います。「う～ん、どうでしょうねえ」と相槌を打ってくれればいいだけなのに、「それはあなたの責任範囲で私の責任範囲ではない」というような反応が返ってくる。責任ということに対する価値観がこれだけ違っているから、謝罪とか反省とかいった感覚も全然違う。ろう者は思いやりがないとか、反省が足りないとか言われてきた。でも、それは、ろう者と聴者で、責任の果たし方とか、他者の責任への関わり方とかが違っているから、そういうふうに見えるだけなんです。同じ日本に暮らしているながら、どうしてこうまで違うんだらうって、私はいつも思っていますが。

もちろん、聴者が多数を占める社会で、ろう者がうまくやっていくためには、ただ文化が違うということを主張するだけでは難しいでしょう。聴者社会はろう文化という異文化に対してもっと寛容になっていかなければいけないけれども、それと同時に、ろう者の側も聴者の文化と自分たちの文化の違

いをもっと知る必要がある。重要なのは、ろうの子どもたちの教育です。そして、教育が変わるためにも、まずは、手話が言語として正しく社会に認知されることが必要でしょう。今日は皆さんに手話の世界とろう者の世界について少しお話しました。私のほうからのお話はこのくらいにしたいと思います。

■質疑応答

★聾学校での教育方法

Q. 質問者 A 男子学生：

聾学校で子どもたちに手話を使わずにどうやって教えているんですか。

A. 市田講師：

基本的には、音声言語をそのまま使う。補聴器をつけてできるだけ音も聞かせます。

ろうの子どもといっても、音がまったく聞こえないわけではないのです。聴覚口話法といって、音を聞ける範囲で聞きながら、口の動きを読ませる。話すほうは声を出すようにさせます。自分の出している声がわからないので、うまく発音することは難しいですが、それを訓練によって獲得させます。そうやって音声日本語が身につくかということ、先ほどお話したようにかなり難しい。それでも、それだけでコミュニケーションをとろうとする。手話を使わないとはそういうことです。

★手話の歴史

Q. 質問者 B 女性学生：

この手話というのはいつからあるんですか。手話の発祥とか。

A. 市田講師：

日本の手話がいつからあったかは本当のところはわかりません。言語と

言語としての手話・文化としてのろう

して成立するには、ろう者が集団で生活し、手話を共有する社会が成立していることが条件になりますね。江戸時代以前にろう者が集団で生活していたというような記録が出てこないとも限りません。ただ、当時の手話がいまの手話につながっているというためには、言語が世代を超えて伝承されるということが起こらなければなりません。そういう意味では、そういうろう者の集団ができたのは、明治11年に京都にろう学校ができてからだと言われています。そこから計算すると、日本の手話の歴史は約120年ということになります。たった120年の歴史しかもたない言語が、なぜ日本語や英語と同等の構造をもつといえるのか。歴史の短い言語はやはり、歴史の長い言語に比べると不十分なところがあるんじゃないかと思うかもしれませんが、これについて話すとなると、それだけで講義1コマ分になってしまいます。そのあたりのことについて知りたい方は、NHKブックスのスティーブン・ピンカー『言語を生み出す本能（上、下）』という本を読んでみて下さい。タイトルの通り、人間は言語を生み出す本能を持っている。そういう本能によって生み出された言語は、歴史の長さとは関係なく、言語としての構造を初めからもっている、ということが書いてあります。この本では手話についても大きく取り上げてあります。

★日本手話と外国の手話の違い

Q. 質問者 C 男性：

日本の手話と外国の手話の違いについて教えてください。

A. 市田講師：

もちろん、国ごとに、というか、地域ごとに違ってきます。ただ、文法的には似た面が多いです。これは先ほどの「本能」で新しく生み出される言語、それを「クレオール」というのですが、クレオールとして生まれてからまだ歴史の浅い言語は、遠く離れたところで生まれた言語同士でもお互いによく似ている。それは人間の本能によって作られたという共通性がよく残っているからです。単語は多くの場合かなり違ってきます。さらに、

日本手話には日本語の影響があるように、例えば、アメリカ手話なら英語の影響を受けているので、お互いかなり違った姿になります。ただ、日本と外国のろう者同士で話す場合には、日本人は日本語からの影響をなるべく排除した形で、アメリカ手話を話す人なら、なるべく英語からの影響を排除した形で話す、しかもゆっくりと、ジェスチャーを交えながらやれば、かなりの程度通じ合うようです。たしかに音声言語同士よりはずっと通じ合うということはある。ただ、ふだん通りの手話で話したら、例えば、アメリカ人同士の手話での会話を日本人が見ても、これは全くわかりません。それは知らない外国語がわからないのと同じです。